

教育者よ恥じろ

三好十郎

かねて私は、学校教師と医者と百姓とを非常に好きで、この三者には単なる職業として以上の意義を見ているものだから、学校教師の悪口をいったことはこれまで一度もない。教員組合などの動きについては、ほとんどあらゆる場合にその見方であろうと思っている。

ことに敗戦後の日本の多くのことに絶望していわずかに望みをつなぎうるのは、現在の子供たちがよく育って、大人になった時分からだろうと思っっているので、その子供たちを教育してくれている人たちを尊重せざるを得ない。

その教育者たちの悪口を今日は書く。いや、尊重したいからこそ、こんな苦言が出てくるのかもしれない。

それは、小、中、高校から大学の教員たちの大部分を通じて、そのかんじんな本務であるところの、学生に対する学習指導能力がおそろしく低劣であることだ。そのことは青年学生の実績の上にハッキリと現われている。数学や理科系統の科目のことは私にはよくわからない。私のいうのは、主として文化系統の諸学科、ことに国語方面の実績のことである。

私は普通の市民としては珍しいくらいに、多数の青少年（そのほとんどが文化方面に興味を持

った者たち)に接触する機会の多い人間だが、それらの青少年たちの読書力と記述力の低下のしかたは、この五、六年、実に極端なものになってきた。それは、驚いたり、なげいたりするよりも、あきれかえって吹き出さざるを得ないくらいだ。十人の中、高、大学生、または大学卒業生をつれてきて、新聞を読ませて、三十行ばかりをつかえも誤りもしないで読める者が三人いるか四人いるか？ 三十人の大学生にハガキを一枚ずつ書かせて、文章や文字を一つも誤らないで書ける者が五人いれば、珍しく優秀な率だといわなければならぬ。

現在の日本語、ことにその記述形式は非常に混乱していて、厳密な意味での基準を失っているともいえるのだから、高度な正確さのことをいはいはじめればキリのない話で、現に私などの文章の記述法も、アヤフヤな点だらけであろう。そういう正確さのことをいっているのではない。普通一般に妥当なものとして通用する程度の正確さを標準にして話しているのである。

自動詞と他動詞の混同、代名詞の使い方のデタラメさ、あて字のメチャメチャさ、ことに常用漢字程度の漢字の誤記のはなはだしさにいたっては、あいた口がふさがらないことが年中だ。青年にとっては一番の関心事であろうところの「恋愛」を「蛮愛」と書くのはまだ良いほうで、

「転愛」と書くのまでいる。「愛」の下部を「爰」にしないで「又」に書くのはザラだ。転したりするのだから、近ごろの青年たちの恋愛がうまく行かないのも当然だろうなどといっても、シヤレにもならない。その他われわれが普通に使う漢字のどこかのヨコ棒やタテ棒が一本抜けていたり、点が一つ少なかったり多かったり、「ハ」が「ㄩ」であったり、これを要するに、近頃流行の漢字クイズに類することを無限に書く。中学、高校、大学を優等生で通した文科系の卒業生の書いた文章の、五行に一つずつ文字と文法の誤りが指摘できた例が、この二年間くらいに六人

も七人もある。しかもその大部分が、私の指摘に答えて、ケゲンそうな表情で「これまで、どの学校の先生からもそのようなことをいわれたことはありません」といった。いや、現にそういつている当の青年が現在、中学や高校の教員をしている例も一つや二つではないのだから、恐怖を感じざるを得ない。

新学制がまだ地についていないからとか戦争のために空白後の混乱だとか、高校や大学の数が急増しすぎたための教員の質の低下だとか、日本語の本来的な複雑さのための教員の質の低下だとか、その他いろいろの理由はあげられようが、それらの理由を全部持つてきても納得のゆくような程度の現象ではないように思う。そして国語教育がこの調子なら、他の理科系統の教育でも似たようなことが起きているだろうと考えてもよからう。実にやりきれない気がする。なぜこんなことが起きたのだろうか？ わからない。ただ、その青少年を教えた教員たちが、それを見ずごして来たためであることはいえよう。教育者として、少し恥じたらよいと思う。

ひかくてきチャンとしているのは、不たしかな漢字など使わずにカナで発音どおりに書く小学生だ。その辺に、この問題の重要なヒントがあるのでないだろうか。

## 大学教授たち

ついでに大学教授の悪口を書く。

これも理科系統は不案内なので、主として文化系の大学教授のことだ。

今の日本の雑誌や新聞の評論類の九十パーセントまでが、大学教授たちのアルバイトから成り

立っている。だから今の政府が、反政府的な言論を一挙に消滅させようと思ったら、よい方法が二つある。その一つは講師の大学取締り法規の中に、大学教授は学外の機関に文章を発表してはならぬ、という一項を加えること。その二つは、すべての大学教授に、現在の三倍の月給をあたえることだ。どちらかといえば、後者のほうがキキメがあろう。

もつとも、このような見方と、それらの大学教授たちが発表している論文の価値とは、一応きはなして考えなければならぬ。価値はなかなかあるらしいのである。「らしい」というのは、わたしがジカに知ったことではなくて、ジャーナリストやインテリ読者たちからのまた聞きだからだ。私自身も時々それらを読むことはあるが、たいがい論文が私にはむずかし過ぎてよくわからなかったり、「急進的」であり過ぎて、私にはついて行けなかったりするので、価値を認める余裕がないのだ。

キキメは確かにある。どんなキキメかという点、私のような平凡なインテリや一般大衆に、「これが自分にはわからないのだから、さては自分はよっぽどの愚者だな」と思わせたり、「この急進性に自分について行けないから、さては自分はよっぽどの保守派だな」と思わせたりすることによって、大衆を置いてけぼりにしてしまうキキメが。なぜならば、普通の大衆というものは、そういうむずかしい論文を書いている大学教授たちがふだんの生活の中で、自分たちと同じようなものの言い方をしたりしているようには思わないからだ。それはちやうど、ここは猛烈な異臭を放つヘッピリ虫がいて、その隣りに普通の虫がいるとして、そのヘッピリ虫と普通の虫が、ともに同じ木の葉を食べて育ったものだとは、チョツと思えないのと似ている。

さて大学教授たちは、世界を論ずる。平和を論ずる。水爆を論ずる。社会や労働の問題を論ず

る。倫理を論じ、人道を論じ、美や芸術を論じ、ストライキを論ずる。ただ一つだけ、彼らは彼ら自身のことは論じない。大学教授という地位の具体的な諸条件、ことにその経済的な待遇について論じた大学教授は、中野好夫氏を除けば、ほとんど一人もいない。

これをもってこれを推すならば、彼らは人類と世界と日本と人道のために、自分一身の利害のことを忘れ去ってしまったところの徹底的な博愛主義者たちらしい。例えば、近江絹糸ストライキの反人道性を論じて、女工さんたちの低劣な労働条件に血の涙を流さんばかりの論文は書いても、自分自身の大学からもらう月給が、三等重役の半分にも当たらない額であつてそれだけで暮らそうものなら大学教授の実質も体面もたもつことができないのはおろか、家族一同が栄養失調になる恐れ十分という実情を書いてその非人道性を鳴らし、「大学教授よ、団結して月給値上げを要求し、もしならずんばストライキすべし」といったような方向への発言は一言も半句もしないのである。それが大学教授だ。ことほど左様に博大きわまる愛他心を持ち、ことほど左様に利己心を持たない進歩主義者が大学教授だ。つまり自分の足元は見ない。または見ないフリをする。または自分には足はなくともよいということになっているらしい。すべて幽霊に似ている。

だから大学教授の評論家たちに任せておけば進歩「主義」は進歩する。しかし「進歩」はしない、足がないのだから。保守主義者にとっては万々歳の現状と、いうべきであろう。

底本.. 「三好十郎著作集 第57巻」三好十郎著作刊行会

1965 (昭和40)年11月16日発行

初出.. 「サンデー毎日(コラム「銅鑼」所載)」

1954 (昭和29)年10月24日号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23)年4月19日